

臼井田宿内砦跡の現状と歴史的意義

藤 由 美

1 開発の危機せまる「宿内砦跡」とは

私が「宿内砦跡」について知ったのは、今年（1994）の初めであった。たまたま手にした佐倉の市民グループの市議会通信の片隅に「宿内公園マンション建設反対」の陳情経過が小さく書かれていた。文中に「臼井城の砦跡が、奇跡的ともいえる良好な状態で残されている宿内公園は、今後臼井城の研究を深める上で貴重な遺構」とある。

ちょうど本会の3月例会で、臼井城跡巡見の予定があり、そのため2月に下見に行く際に、まずは寄ってみることにした。宿内砦跡は、臼井駅の北側の、臼井台団地の丘に続く東南端の舌状台地の先端にあった（写真1）。緑の多いこの丘は、1987年から佐倉市が借り上げ自然公園として使用されていたが、園地が長谷工不動



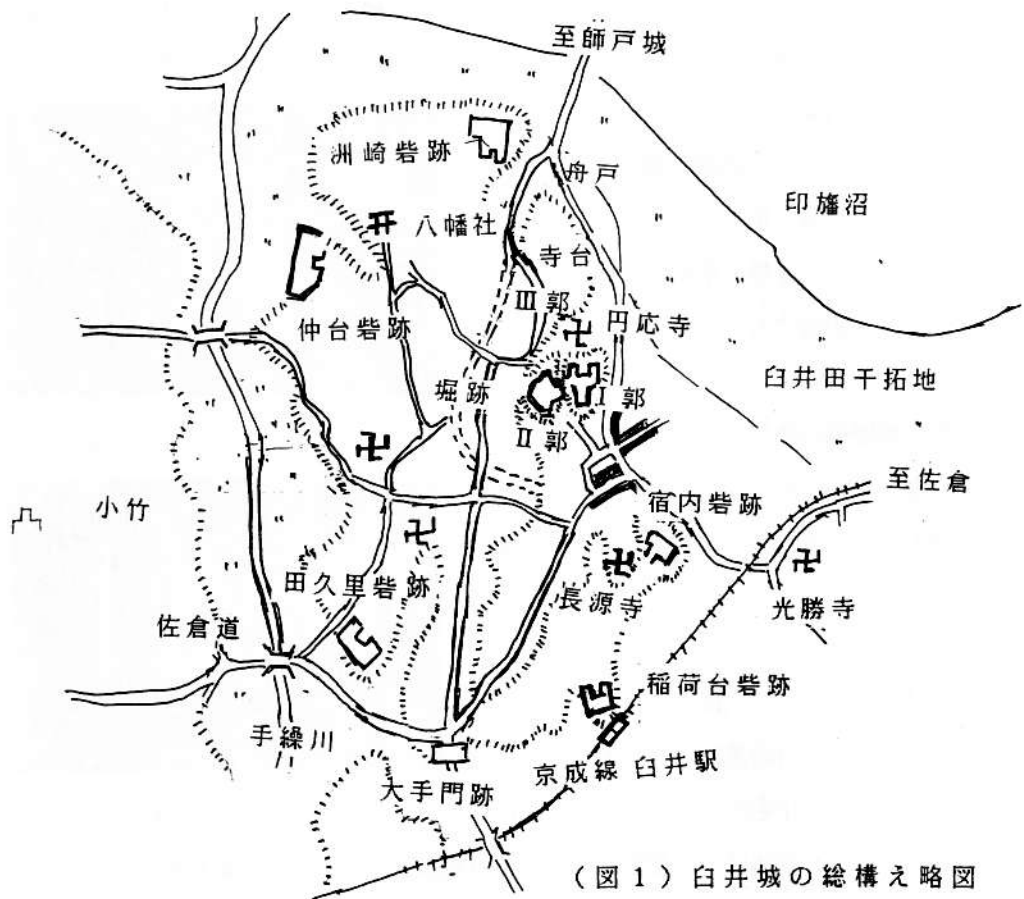
1 宿内砦跡の緑の台地

産に売却され、1992年3月に市の借用期限が過ぎたため、公園は閉鎖された。人手が入らなくなり、ひっそりとした園内は中世のタイムカプセルのようである。そして、初めて見る大きな土塁と空堀、腰曲輪は、「城館調査ハンドブック」の事例のとおりであった（注1）。

私は、この砦跡が破壊される前に、より詳しく見ておこうと何回か通ううち、この遺跡と公園を守る運動を進めておられる野村さん御夫妻に出会い、砦跡の歴史や自然について多くのことを教えていただいた。そして、調査のために樹木に番号が付けられ、測量とボーリング調査が始められたこの夏の砦跡を思いつつ、私達の子供らに郷土の歴史と自然を残しておきたいという願いを込めて、あえて筆を取った次第である。

2 臼井城の総構えと宿内砦の位置

宿内砦跡は、臼井駅北口から京成線に沿って北東に伸びている台地の先端に位置している。その名が示すように、臼井宿の街道がすぐ東の下を通り、また、街道の三叉路を隔てて対岸には、臼井氏の菩提寺・光勝寺の丘を望むことができるという、文字どおり



(図1) 白井城の総構え略図

要衝の地である(図1)。

白井城の総構えについては、赤松宗旦の『利根川図誌』(安政2年・1855)に「大川源五右エ門書成製・白井古城図」が載っている。この古城図では、城の主郭になる「本丸」(I郭)と「二ノ門」内側の「字城ノ内」(II郭、通称二ノ丸)を中心に、北に洲崎、西に仲台と田久里、南に稲荷台の4砦が半円状に配置されており、近年発見された宿内砦跡は、「古図にない5番目の砦」ということになる。

そして、この東端の砦跡の発見により、南北約2キロメートル、東西約1キロメートルに及ぶ城域が確認されたのであった(注2)。しかし、宿内砦跡を除く古図の4砦跡は、すべて宅地造成によって完全に消滅したので各砦の位置は古図により推測し、その状況は唯一残る宿内砦により類推するしかないのである。

3 宿内砦跡の現状

宿内砦跡の1994年8月現在の状況は、図2のような縄張りであり、舌状台地の先端部を占めていて、台地のくびれている部分を2メートルの高さの土塁Aが横断し、郭を二分している（写真2）。

稲荷台の尾根に続く南側の郭は、60×100メートルくらいの長方形で、土塁の手前側に空堀の痕跡Bがある。土塁の東側は、堀が幅広くなっていて、東斜面に沿う腰曲輪Cにつながっている。

東側の腰曲輪の外側に、下から上がってくる小道が巻いているが、小道の上部Dは、堀底状の切通しとなっている（写真3）。この小道の右斜面に石仏があり、上部左側には小さな墓地がある。

西側は、急な崖で、下に腰曲輪Eがある。

なお、旧公園入口の道路沿いの部分は、園地への通路を残して住宅が並び、その奥は畑になっている。ここの道路は、西側の道路と東側の堀底道とが合流する最も高く、かつ、狭い尾根の部分なので、堀などがあったものかも知れない。

土塁の北側（台地の先端部）の郭は100×150メートルくらいの台形で、東側斜面には腰曲輪Fが3面ある。樹々の枝を払えば、南は王子台方面から北東に印旛沼、北西部に城の主郭の森を一望することができるだろう（写真4）。



2 郭を二分する高い土塁



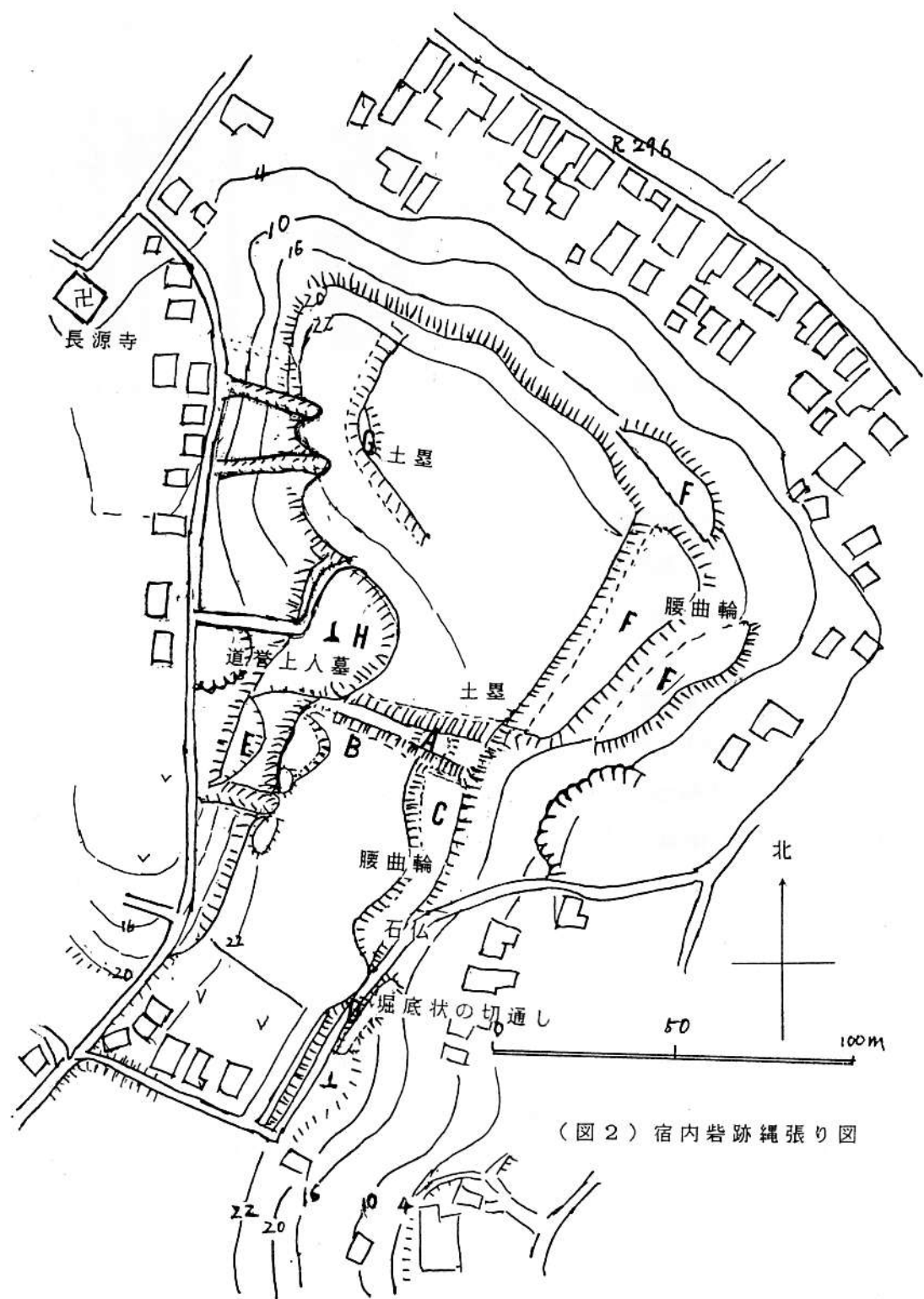
3 堀底状の切通し



4 北側郭から王子台方面を望む



5 北西斜面の竹林中の堅堀状の溝



(図2) 宿内砦跡縄張り図

北西側は、L字型に1メートルほど低くなっていて、竹林の中を小さな腰曲輪があるほか、二本の堅堀があり（写真5）、また、L字角の部分Gが土塁状にやや高くなっている。

西側は、崖下が半円形のやや大きな腰曲輪Hで、道誉上人や長源寺歴代住職、壇家の墓地になっている（写真6）。北側の郭から墓地へ下がる小道と墓地から下の道路へ出る小さな階段がある。



以上のように、土塁、堀、腰曲輪など、16世紀後半の城砦の形態が、まさに「奇跡的ともいえる良好な状態で残った貴重な遺構」なのである（注3）。

4 宿内砦の歴史的意義

臼井城は、12世紀千葉氏の一族臼井氏が居城として以来、16世紀の終わりまで、下総の重要な軍事拠点であり、この城をめぐる3回の大きな攻防戦が行われた歴史を持っている（注4）。そして、「古城図」で見られるような総構えの整備が行われたのは、16世紀後半、千葉氏の重臣原氏が城主となってからと推定されている（注5）。

ところで、城砦跡としてしっかりした遺構を持つ宿内砦が、なぜ「古城図」にもれていなかったという疑問が持たれる。その謎を解く鍵は「長源寺」にあるといえるだろう。現在、長源寺は、宿内砦跡の台地北西の谷合にあるが、安永元年（1772）に火災で焼失する前は、「古城図」に記されている場所、すなわち、砦跡の台地上にあったという（注6、7）。

長源寺は、元龜元年（1570）道誉上人により、印旛沼を望むこの景勝の地に「新大巖寺」として創建された。上人は、天文20年（1551）に生実城主原胤秀の招きにより、千葉生実大巖寺を開き、後に浄土宗大本山の芝増上寺第七世を継いだ高僧で、長源寺の建立も、臼井城へ移った原氏の熱意ある招きによるものという。寺の開山の4年前の永禄9年（1566）に上杉謙信による攻撃があり、上杉軍の退却後は、千葉・原氏による下総支配が続いていた。とはいえ、元龜年間（1570～72）は、里見軍が下総侵入をうかがっていた極度の緊急状態にあった時期である。このような時代に建立されたこの寺は、文字どおり、「城砦寺院」の典型であったと想像される。

これまで、臼井本城が直接印旛沼に面する東側の守りに比して、洲崎から稲荷台までの北～西～南の防御のほうが嚴重であるといわれてきた（注8）。戦闘の前線は、王子台や米本、吉橋などの南西側にあり、千葉氏宗家の本拠地・本佐倉城のある北東側の方面は、補給路として水運の確保に重点が置かれたと推定される。臼井城のⅠ、Ⅱ、Ⅲ郭の調査を行った佐倉教育委員会の報告によれば、Ⅲ郭の寺台地区の遺構に注目し、円応寺が戦国期、「寺台」の台地上にあった可能性を示唆している（注3）。とすれば、かつての円応寺も「城砦寺院」であり、現在の円応寺のある「江間」は、城の舟付場としての機能をもっていたものと推定される。臼井城は、その主郭部を沼に面し、右手の岬上に長源寺、左手に入江とそれを守る台地上の円応寺という両翼の城砦寺院に抱かれるように東岸の守りを固めていたのであった。

房総には、舌状台地の先端に城砦の遺構を持つ寺社がいくつか残っている。というより、寺社があるゆえに、城砦や城館の遺構が開発による破壊を免れてきたといえるだろう。景勝の地ゆえに、古くから神社や寺院が営まれてきた所が、戦時に城砦の役割を果たしたものの、あるいは、吉橋城跡のように、戦後、戦死した将兵の菩提を弔うための寺院として現在に至っているものなどさまざまである。明日の命も知れないがゆえに深く神仏を信じた武将達、そしてその一人であった原胤栄は、高僧の誉れ高い道誉上人を招くにあって、当時この景勝の地に既にあった守りの固い城砦を、特に寺院のために供したという（注9）。また、この台地の郭を二分する高い土塁については、古代の塚か古墳を加工して築いた可能性もあるだろう。宿内砦の深い森は、そのような古代から中世の歴史を秘めて静かに私達に語りかけてくれるのである。

5 「長源寺山」その後

宿内の台地は、江戸時代に入って臼井城が廃城となり、砦跡の遺構が戦乱の世と共に忘れ去られ、「新大蔵寺」が「長源寺」と名を改めた後、いつしか長源寺山と呼ばれるようになった。その後、安永元年（1772）の火災により、長源寺は焼失し、現在の地に移った。ここは、谷合で水質の良い井戸があり、また、臼井宿として賑わった街の寺院として、行政や教育の一端を負うためにも、山の上ではいかにも不便であったからであろう。

その後、「長源寺山」は、原氏の家老を勤めたという大森家の所有となり、「おおもりやま」と呼ばれ、農家が刈敷きを採りに入るほかは、耕作もされずに自然に返り、遺

構は深い森の中に守られ、まれにみる良い保存状態で眠り続けた。城砦の遺構が確認されたのは、1983年に組織された「臼井城跡研究会」（岡田茂弘会長）の調査以降のことである。

そして、市は、この地を借りて自然公園として整備し、市民のいこいの場所となったが、バブル期の地価高騰の最中、市が買取りをためらっているうちに、大手の不動産屋の所有となった。

この山には、「大杉さま」の伝承など、興味の深い話も多い（注7）。しかし、「本丸、二ノ丸」と呼ばれる主郭部に比べて、宿内砦の遺構は、市の史跡案内の冊子にも紹介されず（注10）、千葉県教育委員会の報告書に記された程度であった（注3）。この遺跡が文化財として論じられるようになったのは、マンション建設による破壊を目前にして、市民が立ち上がったからなのである。

6 砦跡を守る市民と運動の経過

遠足や散策にと市民が親しんできた公園が巨大なマンションになるという情報は、地元住民に大きなショックを与えた。そして、1992年3月、園地の貸借期限切れを前にして、稲荷台の野村忠男氏や石井辰之助氏により「文化遺産の保護」をかかげて、「臼井宿内遺跡・公園を守る会」が発足した。設立総会は、郷土史家高橋三千男先生の「遥かなる臼井一族」の講演から始まったということからも、一般的なマンション建設反対の運動とは異なったユニークなスタートであった。

野村氏は、郷土史家、長源寺の御住職、更に土地の人々の話や伝承を聞き書きして、「おおもりやま」の歴史を明らかにし、また、イヌビワ、ユズリハなどの植物や鳥の生態など、貴重な自然にも注目して市民の心に訴えた。そして、1993年5月には市長へ質問状を提出し、9月には3700名余の署名を集めて市議会に陳情書を提出された。

その結果、市議会での審議の中において、市長の「文化財として認識し、慎重な審議を望む。」という答弁を得た。そして、建設委員会での審議も11月から始まり、12月にも継続して審議された。しかし、1994年3月に、市議会は、市民と市当局の保全の意向に反して「陳情を不採択にする。」という議決をした。

そして、5月28日、この不採択の議決を待っていたかのように、施工者による地元説明会が開かれた。「進入道路の確保等四つの条件が満たされなければ、開発は許可しない。」という市の方針にもかかわらず、この8月には着工の準備を始めるという性急さ

に、住民はびっくりするとともに、あまりにも巨大な計画に強い不安を訴えているという状況にある。

1994年のこの夏、宿内砦跡の保全は、最大の山場を迎えている。楽観を許さない状況の中で、「これからが本番ですよ。」と「守る会」の野村氏は言う。市民の力で遺跡と緑を守れるか。これは、隣の佐倉市のことではなく、同時代を生きた吉橋、米本の城砦遺跡を持つ私達八千代市民の課題でもある。

春は新緑に山桜が淡く霞み、夏は山ゆりが咲き、緑陰に涼風が吹く。石仏の覗く小道をたどり、土塁に登り、「ここが、きっと虎口に違いない。ここには、櫓があっただろう。」と想像力がめぐる。そしてまた、曲輪から王子台や印旛沼を望みながら、下総の覇者である千葉氏・臼井氏・原氏の拠った臼井城の総構えや師戸、岩戸の支城群、それに村上、吉橋における前線の攻防にも考察がめぐる。

このような「思索と発見に満ちた宿内の緑の台地を、後世への遺産として伝えたい」と思うものである。諸先輩の助言を切にお願いしたい次第である。

参考文献

注1 『城館調査ハンドブック』 千田嘉博ほか著

注2 『臼井歴史散歩』 臼井環境整備委員会発行

注3 『千葉県中近世城跡研究調査報告書』 第4集 千葉県教育委員会

昭和59年3月発行

注4 『房総の古城址めぐり』 下巻 下総国 府馬 清著

注5 『臼井城の謎』 岡田茂弘著

(臼井文化懇談会創立一周年記念会誌『うする』所載)

注6 『臼井とかかわりのある社寺・人々』 中村正著

注7 『臼井宿回顧』 佐倉伝説めぐりの会

注8 『房総の中世城郭』 清川一史著 (『千葉県の歴史』第2号所載)

注9 長源寺住職兼務・松林寺住職鳥井氏から野村忠男氏の聞き書きによる。

注10 『佐倉ひとり歩き』 佐倉市民憲章推進協議会発行